

「主体的に学習に取り組む態度」の評価に関するガイドライン

奈良県教育委員会事務局
学ぶ力はぐくみ課

1 学習評価の意義等について

1) 学習評価の意義等

学習評価は、学校における教育活動に関し、児童生徒の学習状況を評価するものです。「児童生徒にどういった力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉え、教員が指導の改善を図るとともに、児童生徒自身が自らの学びを振り返って次の学びに向かうことができるようにするためには、この学習評価の在り方は極めて重要です。

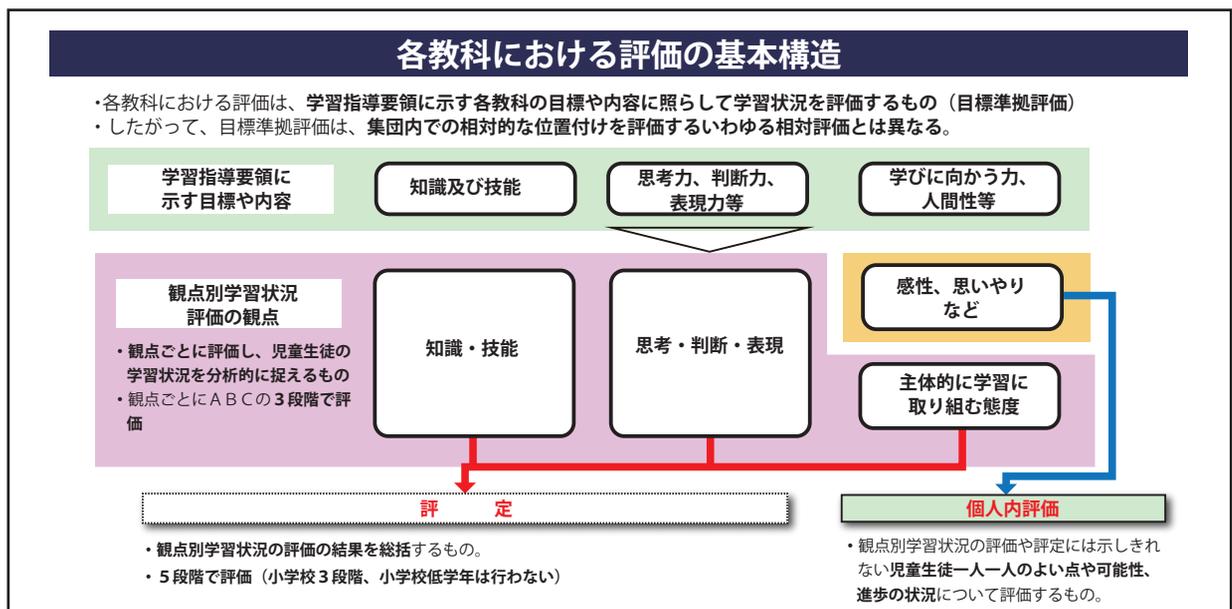
児童生徒の学習状況を評価するために、教員は、個々の授業のねらいをどこまでどのように達成したかだけでなく、児童生徒一人一人が、前の学びからどのように成長しているか、より深い学びに向かっているかどうかを捉えていく必要があります。そのためにも、児童生徒に身に付けさせたい力を明確にし、その力が一人一人に確実に身に付くよう指導を工夫するとともに、日々の授業において、児童生徒の学習状況を評価し、その結果を児童生徒の学習や指導の改善に生かしていくことが大切です。



2) 平成29年改訂学習指導要領における各教科の学習評価

各教科の学習評価については、平成29年改訂学習指導要領においても、学習状況を分析的に捉える「観点別学習状況の評価」と、これらを総括的に捉える「評定」の両方について、学習指導要領に定める目標に準拠した評価として実施するものとされており、整理された評価の観点も踏まえて評価の基本構造を図示化すると、図1のようになります。また、観点別学習状況の評価や評定には示しきれない児童生徒一人一人のよい点や可能性、進歩の状況については、「個人内評価」として実施するものとされており、児童生徒が学習したことの意義や価値を実感できるよう、日々の教育活動等の中で児童生徒に伝えることが重要です。

図1



2 主体的に学習に取り組む態度の評価について

1) 平成29年改訂学習指導要領を受けた観点の整理

平成29年改訂学習指導要領においては、全ての教科等の目標及び内容が図2のように、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の育成を目指す資質・能力の三つの柱で整理されました。各教科等の指導を通してどのような資質・能力の育成を目指すのかを明確にしながらか教育活動の充実を図るとともに、児童生徒の発達の段階や特性を踏まえ、資質・能力の三つの柱の育成がバランスよく実現できるよう留意する必要があります。

観点別学習状況の評価については、こうした教育目標や内容の再整理を踏まえて、小・中・高等学校の各教科を通じて、図3のように4観点から3観点到整理されました。

その際、「学びに向かう力、人間性等」に示された資質・能力のうち、観点別評価を通じて見取ることができる部分を観点別学習状況の評価の観点として学校教育法に示された「主体的に学習に取り組む態度」として設定しています。そのことに留意し、平成29年改訂学習指導要領に示された、各教科等における「学びに向かう力、人間性等」に関わる目標や内容の規定を踏まえ、各教科等の特質に応じた評価方法の工夫改善を進めることが重要です。

図2

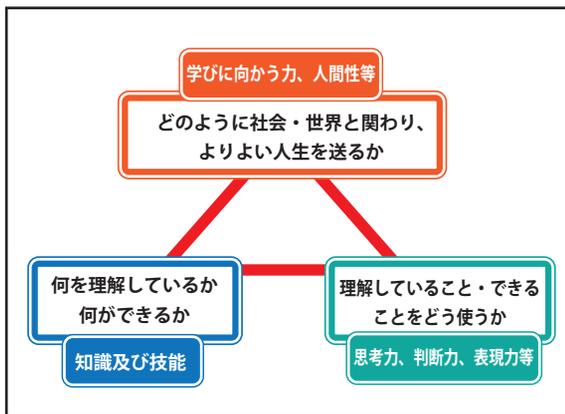
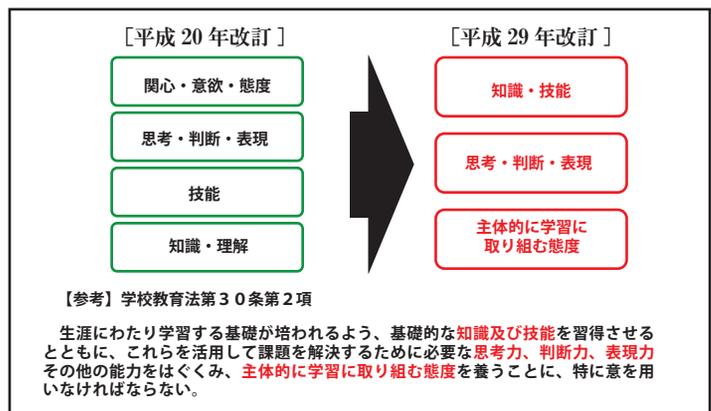


図3



2) 「主体的に学習に取り組む態度」の評価の基本的な考え方

ア) 学習における「意思的な側面」を評価する

平成28年12月21日付けの「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」では「主体的に学習に取り組む態度」の評価について次のように示しています。

子供たちが自ら学習の目標を持ち、進め方を見直しながらか学習を進め、その過程を評価して新たな学習につなげるといった、学習に関する自己調整を行いながらか、粘り強く知識・技能を獲得したり思考・判断・表現しようとしたりしているかどうかという、意思的な側面を捉えて評価することが求められる。

平成28年12月21日 中央教育審議会 答申

「主体的に学習に取り組む態度」は、学習前の診断的評価のみで判断したり、児童生徒の性格や行動面の傾向が一時的に表出された場面である授業中の挙手の回数やノートの取り方などの形式的な活動で評価したりするものではありません。各教科等の「主体的に学習に取り組む態度」に係る評価の観点の趣旨に照らして、知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりするために、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら、学ぼうとしているかどうかという意思的な側面を評価することが重要です。

イ) 「主体的に学習に取り組む態度」の評価対象について

「主体的に学習に取り組む態度」の評価としては、「主体的に学習に取り組む態度」に係る各教科等の評価の観点の趣旨に照らし、

- ① 知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面と、
 - ② ①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面、
- という二つの側面を評価します。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価対象となる二つの側面

① 粘り強い取組を行おうとする側面

② 自らの学習を調整しようとする側面

※各教科等において、評価対象に特性があることに留意する必要があります。

ウ) 従来「関心・意欲・態度」との違いについて

従来「関心・意欲・態度」の評価に当たっては、授業中における挙手・発言の回数やノートの取り方、提出回数など「形式的な活動」を見取る傾向にあったことが指摘されています。いわば、性格や行動面などの傾向など、ともすれば、学習内容との結び付きを問わない外在的な「関心・意欲・態度」が評価されてしまうのではないかという点も危惧されてきました。そのため、「主体的に学習に取り組む態度」の評価では、挙手の回数やノートの取り方など、性格・行動面の一時的な現れを評価するのではなく、「意思的な側面」を評価することが重要であるとされています。

従前の観点である「関心・意欲・態度」においても、「各教科等の学習内容に関心をもつことのみならず、よりよく学ぼうとする意欲をもって学習に取り組む態度」を評価することが本来の趣旨でした。今回の改訂では、発言の有無などの「形式的な活動」というよりも、「自らの学習状況を把握し、自らの学習を調整しながら、学ぼうとしているか」という学習への意思的な側面を含むことを鮮明にするため、観点の表記を「主体的に学習に取り組む態度」として示されています。

エ) 自らの学習を調整しようとする側面について

自らの学習を調整しようとする側面とは、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなどの意思的な側面のことです。学習の調整に関する態度は必ずしも、学習の調整が「適切に行われているか」を判断するものではありません。単元や題材を通じたまとまりの中で、児童生徒が自らの学習を調整する場面を適切に設定し、児童生徒の学習の調整が知識及び技能の獲得や、思考力、判断力、表現力等の育成に結び付いていない場合には、それらの資質・能力の育成に向けて児童生徒が適切に学習を調整することができるよう、その実態に応じて教員が学習の進め方を適切に指導することが大切です。

自らの学習を調整しようとする側面からの評価のポイント

- 評価に当たっては、児童生徒が自らの理解の状況を振り返ることができるような発問の工夫をしたり、自らの考えを記述したり話し合ったりする場面、他者との協働を通じて自らの考えを相対化する場面を、単元や題材などの内容のまとまりの中で設けたりするなど、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を図る中で、適切に評価できるようにしていくことが重要です。

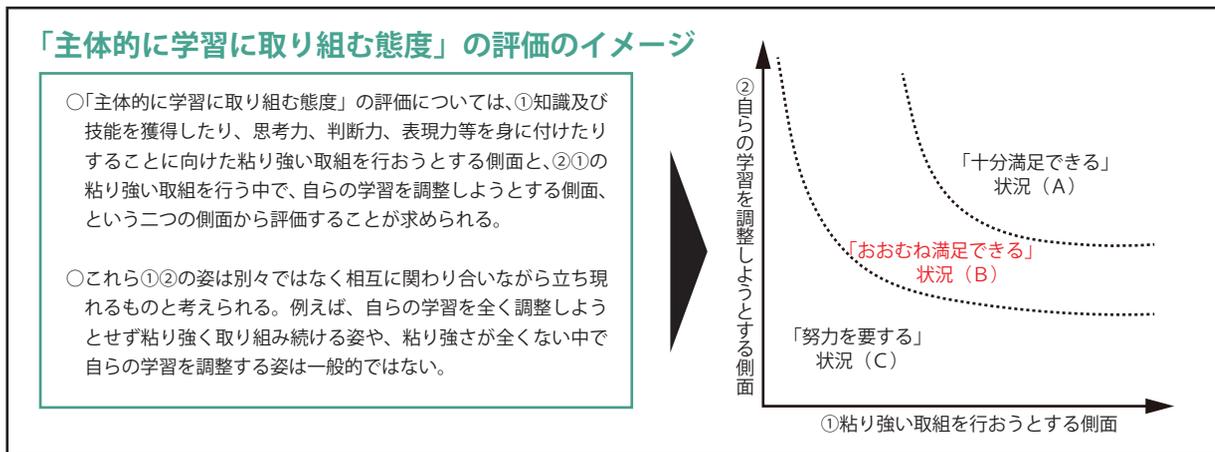
オ) 「主体的に学習に取り組む態度」の評価のイメージ

「主体的に学習に取り組む態度」の観点については、ただ単に学習に対する粘り強さや積極性といった児童生徒の取組を承認・肯定するだけでなく、学習改善に向かって児童生徒が自らの学習を調整しようとするかどうかを含めて評価します。

このことから、各教科等の学習において「主体的に学習に取り組む態度」の評価を行った場合に、粘り強さが十分に認められたとしても、自己調整が不十分であるというような、二つの側面の一方しか認められないことも考えられます。例えば、①の「粘り強い取組を行おうとする側面」が十分に認められたとしても、②の「自らの学習を調整しようとする側面」が認められない場合には、「主体的に学習に取り組む態度」の評価としては、基本的に「十分満足できる」(A)と評価されないことになります。

これは、粘り強さの態度を認めるだけではなく、学習の今後に向けて、自ら学習を調整しようとしているかどうかという双方の側面を一体的に見取ることが、目指すべき資質・能力としての「学びに向かう力、人間性等」を涵養する上で、極めて重要であるからです。

図 4



カ) 「主体的に学習に取り組む態度」の評価の視点

「主体的に学習に取り組む態度」の評価は、『オ』「主体的に学習に取り組む態度」の評価のイメージ』のとおり、知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりするために粘り強く、試行錯誤しながら、学習の自己調整を図る姿を評価することから、知識及び技能を習得したり、思考力、判断力、表現力等を育成したりする場面に関わって行います。その際、粘り強く取り組む態度に加えて、児童生徒が自己調整を図る中で、知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりしているか、「知識・技能」「思考・判断・表現」の観点からも児童生徒の学習状況を見取ることが大切です。「主体的に学習に取り組む態度」の評価の結果を、知識及び技能の習得や思考力、判断力、表現力等の育成に関わる教員の指導や児童生徒の学習の改善にも生かすことによりバランスのとれた資質・能力の育成を図るという視点が重要です。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価のポイント I

- 粘り強く取り組む態度の視点に加え、自己調整を図る中で、知識及び技能を習得しているかといった「知識・技能」「思考・判断・表現」の観点からの学習状況も踏まえ、評価する。
- 「知識・技能」「思考・判断・表現」の観点に関わる児童生徒の学習状況と照らし合わせながら学習や指導の改善を図ることが重要。

キ) 「主体的に学習に取り組む態度」の評価と他の観点の評価との関係について

単元の導入の段階では観点別の学習状況にばらつきが生じるとしても、指導と評価の取組を重ねながら授業を展開することにより、単元末や学期末、学年末の結果として算出される3段階の観点別学習状況の評価については、観点ごとに大きな差は生じないものと考えられる。

平成31年1月21日 中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会 報告

平成31年1月21日付け「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」では、指導と評価の取組を重ねながら授業を展開することにより、単元末等の結果として算出される3段階の「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の評価については、観点ごとに大きな差は生じないものと考えられると示されています。このことから、「知識・技能」「思考・判断・表現」の実現状況が「努力を要する」であるのに、「主体的に学習に取り組む態度」の実現状況が「十分満足できる」になること(「**CCA**」)や、「知識・技能」「思考・判断・表現」の実現状況が「十分満足できる」であるのに、「主体的に学習に取り組む態度」の実現状況が「努力を要する」になること(「**AAC**」)という評価結果は、指導と評価の取組を重ねながら授業を展開すれば通常考えられないということです。

前述のとおり「主体的に学習に取り組む態度」の評価は、知識及び技能を獲得させたり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりする場面に関わって行われます。そして、その評価の結果を指導や学習の改善に生かし、バランスの取れた資質・能力の育成を図

る目的としているという視点から考えれば、単元末、学期末や学年末に向けて、3つの観点の評価の結果は、ばらつき(「CCA」や「AAC」、「CAA」や「ACA」等)が生じなくなるよう指導や学習改善を図る必要があります。このことから、指導計画・評価計画の偏り等といった要因により、例えば「ACC」「CCA」などといった評価結果が見られた場合は、そのばらつきの原因について、学年会や教科会議などを経て各学校で十分に検討し、児童生徒の学習や教員の指導の改善を速やかに図る必要があります。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価のポイントⅡ

- 学期末や学年末等の大くりの期間で評価した際、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の各観点の評価結果がばらつくこと(「CCA」や「AAC」等)は考えられない。
- 単元末等の評価の結果として、各観点の評価にばらつき(「CCA」や「ACC」、「CAA」や「ACA」等)が見られる場合は、その原因を検討し、速やかに学習や指導の改善を図ることが必要。

ク) 「主体的に学習に取り組む態度」の評価の方法

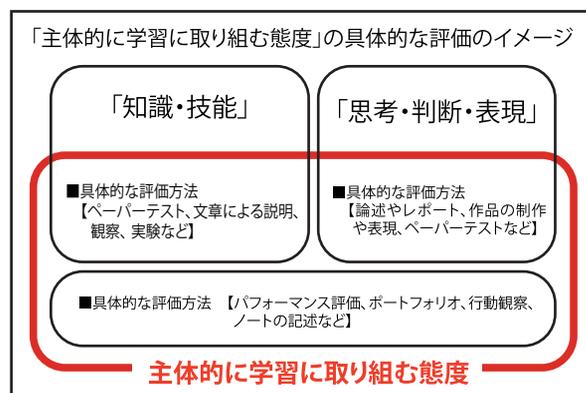
「主体的に学習に取り組む態度」の具体的な評価の方法としては、ノートやレポート等における記述、授業中の発言、教師による行動観察や、児童生徒による自己評価や相互評価等の状況を教師が評価を行う際に考慮する材料の一つとして用いることなどが考えられる。その際、各教科等の特質に応じて、児童生徒の発達の段階や一人一人の個性を十分に考慮しながら、「知識・技能」や「思考・判断・表現」の観点の状況を踏まえた上で、評価を行う必要がある。したがって、例えば、ノートにおける特定の記述などを取り出して、他の観点から切り離して「主体的に学習に取り組む態度」として評価することは適切ではないことに留意する必要がある。

平成31年1月21日 中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会 報告

「報告」では、「主体的に学習に取り組む態度」の評価の方法として、ノートやレポート等における記述、児童生徒の記述や発言、行動観察、自己評価等を評価資料とすることが示されています。一方、ノートにおける特定の記述などを取り出して、他の観点から切り離して評価することは適切ではないと示されています。

『力』「主体的に学習に取り組む態度」の評価の視点』においても述べたように、「主体的に学習に取り組む態度」の評価を行う際には、「知識・技能」「思考・判断・表現」の観点からの学習状況も踏まえることに留意する必要があります。「主体的に学習に取り組む態度」の評価は、各教科等の特質に応じて、授業中の発言や行動観察、ノートやレポート等における記述に加え、論述、パフォーマンステスト、ペーパーテスト等を評価資料として「知識・技能」「思考・判断・表現」の観点を踏まえ、自らの学習を調整しながら、知識及び技能や思考力、判断力、表現力等が身に付くよう粘り強く取り組もうとしていたかを評価していきます。(図5)

図5



学習評価に関する資料等のリンク集

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」

平成28年12月21日 中央教育審議会



「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」

平成31年1月21日 中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会



「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）」

平成31年3月29日 初等中等教育局長通知



「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 (小学校編・中学校編)

小学校編				中学校編			
国語		社会		国語		社会	
算数		理科		数学		理科	
生活		音楽		音楽		美術	
図画工作		家庭		保健体育		技術家庭	
体育		外国語		外国語		総合的な学習の時間	
総合的な学習の時間		特別活動		特別活動			